

2025年11月30日 第二礼拝

説教題『見よ、わたしの僕』イザヤ書42章1〜7節、マタイ福音書1章17節

主任牧師 加藤 誠

「見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、迎える者を。彼の上にわたしの霊は置かれ、彼は国々の裁きを導き出す。」(イザヤ書42章1節)

「マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」(マタイ1章14節)

「この子は自分の民を罪から救う」。この言葉は、ヨセフが自分の関係のないところで妊娠したマリアを密かに離縁しようとした時に、天使を通して受け取った言葉です。私たちを「罪から救う救い主」としてイエスはお生まれになりました。

数週間前に「山本由伸がドジャースの救世主となる」という見出しが新聞に踊りました。崖っぷちのドジャースを山本由伸が救ったのです。また「人手不足に悩む農業の救世主として、AIやロボット技術のスマート農業が期待される」という記事も目に留まりました。一般に「救世主」とは危機や苦境から救い出す人を言います。では聖書が語る「罪から救う救い主（救世主）」とはどういう救い主なのでしょうか。

「キリスト教は罪とか、罪人と言われるので嫌だ」という声を聞きます。確かにキリスト教信仰において「罪」について語らないわけにはいきません。が、聖書は決して私たちを「犯罪人扱い」しているわけではありません。「罪」とは「的外れ」という意味。本来あるべきところから「ズレている状態」のこと。人は造り主なる神が愛を注いで命の息を吹き入れられ、隣人と愛を分かち合って生きるように造られたのに、自分の好きなように生きたいと神の愛に背を向けて、隣人との間に悲しみを生み出している。そのように神の祝福と恵みからズレて暗闇を創り出している状態を「罪」と言います。わたしと隣人との関係は神の祝福と恵みを豊かに生きているのでしょうか。また今の私たちの世界も、人與人、国と国の争いは絶えず、神の祝福をみんなで喜びたたえるところからは程遠い状態にある。これを聖書は「罪」と言います。

そのような「的外れで、幸いから程遠い状態＝罪」から救うため、私たちを神の愛に連れ戻し、つなぎ直して、神と隣人とのあるべき関係に導くために、イエスは生まれてくださいました。このイエスの誕生の約六百年前に、イザヤが神が立てられる救い主について預言したのが「見よ、わたしの僕」という言葉で始まる42章「僕の歌」の箇所です。「僕」とは主人の御心を忠実に実行する人。イエスこそ、神の御心を実行する僕として神がお立てになった方。ここで繰り返されている「裁きを導き出す」という言葉は、口語訳聖書では「道を示す」「真実の道を示す」と訳されている言葉。「神の前に何が正しくて、何が間違っているのか」。人が考える「良し悪し」ではなく、神の御心に基づいた「良し悪し」（道）を示すということです。この僕は、心や

体に傷を負い痛んでいる一人ひとりに優しく寄り添い、その人の灯心（神から与えられた命の灯）が消えないように守って輝かせる方。「見ることのできない目を開き、捕らわれ人をその枷から、闇に住む人をその牢獄から救い出す僕」。そのような神の僕、救い主としてイエスが来られることをイザヤは預言したのです。

例えば、私たちには「やられたらやりかえしたい」と思う感情があります。「やられっぱなし」は耐えがたいし、「やられっぱなし」が放置されたら社会の規範が保てない。人の命を殺めたり損害を与えた者に対しては、法律や裁判が相当の償いを求めることで成り立っている。一方、国同士の争いの場合は裁判が成立しませんから、武力や経済的圧力で「やられたらやりかえす」、相手に制裁を加える。しかし、そのために「やられた方がまたやりかえす」、憎しみと怒りの連鎖がいつまでも続く。私たち人類は昔からそれを繰り返してきています。人間の自然な感情である「やられたらやりかえしたい」「相手にも痛い目にあわせたい」。この感情がものさしになっている限り、私たちは神の祝福と恵みから程遠い、的外れな道を歩み続けることとなります。その私たちの自然な感情に基づいた「怒りや憎しみの連鎖」を断ち切り、私たちを神の祝福と恵みを生きる道を示す救い主として主イエスは来てくださいました。十字架で自分に唾を吐きかける者たちを前に、主イエスは「赦しの祈り」を父なる神にささげて、弟子たちに「あなたは報復に生きるのではなく、わたしの赦しの祈りの証し人として歩いていきなさい」と、神の希望に向かう新しい道を託されたのです。

今朝の週報巻頭言には、この 20 年間ルワンダで和解と平和の働きに仕えてこられた佐々木恵さんの「フランソワーズさんの赦し」を紹介させていただきました。31 年前のジェノサイドで心と体に深い傷を負ったフランソワーズさんは当初、加害者への憤りと憎しみを抑えきれず、人々から悪魔呼ばわりされるほどでした。しかし彼女は途中で気づくのです。憤りと憎しみの感情に生きている限り、彼女自身がその縄目に苦しめられ続けることになると。そして自分でその縄目を断ち切った時、彼女は神からの安らぎと落ち着き、優しさと美しさを取り戻していったのです。またわたしがルワンダで出会ったマリアさんは、自分を深く傷つけた人々を赦せない自分の感情と向かい合いながら聖書を開き、主イエスの十字架の祈りを御自分の祈りとしていくことで、報復の連鎖を断ち切っていかれました。それは主イエスの赦しによる希望の歩みへの一歩でした。主イエスは十字架において「あなたを苦しめている深い傷の痛みをわたしが引き受ける。赦せない思いをわたしに委ねて、あなたは神の祝福と恵みを生きていきなさい」と、私たちに神の命に向かう新しい希望の道を示してくださいました。「見よ、わたしの僕」。この方こそ私たちの罪の足枷を解き、私たちを闇の中から導き出して神の光の下に生きる道を示してくださいました方です。この方による「罪からの救い」が、私の上に、私と隣人の間に、世界になることを祈っていきたいのです。